

2022年度

入学試験問題

国語

(時間 50分)

注意事項

1. 指示があるまで、問題用紙は開かないこと。
2. 問題は 一～四 の4問あります。
3. 「解答用紙」は表紙の裏側になっています。
4. 「解答用紙」には答えと、受験番号、名前だけを記入しなさい。

一

あとの問いに答えなさい。

問一

次の①～④の文には誤った漢字が一字使用されている。例にならって誤った漢字を抜き出して、正しい漢字に直しなさい。

例 私たちは以頼人のために、仕事をしている。 誤 以 ↓ 正 依

- ① プレゼンの資料を探すために概当する書籍を本棚の隅々まで探した。
- ② 怪我の治療のために病院に通い、診察とリハビリを交互にすることになっている。
- ③ 文化祭の企画を募集すると、暫新な発想のアイデアが豊富に集まった。
- ④ 放課後の教室に残って勉強した努力が実って、試験で優修な結果を残せた。

問二

次の①～④の語句の意味として、適切なものをそれぞれあとのア～クから選んで記号で答えなさい。

- ① マイノリティー ② 葛藤 ③ 示唆 ④ アイデンティティ

- ア 自分とは何かという自己認識。
- イ 心の中の相反したものを選ぶことに迷うこと。
- ウ 多数派。
- エ 少数派。
- オ それとなく示すこと。
- カ はっきりと示すこと。
- キ 心の中に浮かぶ像。イメージ。
- ク 物事を行なう過程。経過。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「かわいい子には旅をさせよ」「若いうちには旅をさせよ」というのは、多感な青年期に広い世界を知ってほしいという、大人から若い人に向けたメッセージ。

でも大人というのは、なかなか現実的な存在で、その言葉のウラには「大人になると忙しいから、自由を謳歌^{おつか}できるのは若いうちだけだよ」という意味も暗に含まれている。

でも、私は違うと思う。若いうちに旅をするのは、大人になっても、中高年になっても旅をつづけるため、ではないか。多感な学生時代に旅のおもしろさ、醍醐味^{だいごみ}を知ると、きっと大人になっても旅の習慣はやめられない。たとえ忙しい毎日であっても、週末や休暇を使つては旅に出るようになる。なぜなら、旅の効用を知っているからだ。

では、旅^Aの効用とはいったい何だろう。

それは、自分のいる場所が当たり前の環境ではないと、身をもって知ること。自分はちっぽけな存在で、自分の外には多様で広い世界がある。そのことを頭ではなく、肌で感じられることが旅の効用だ。

広い世界があることくらい、誰もが頭では知っている。なのに、なぜ学生時代のみならず、大人になっても旅に出て、広い世界を感じる必要があるのだろうか。

それは、大人の社会にも狭い世界がたくさんあるから。たとえば会社や組織には、性格の悪い上司やイヤミな同僚がいる。やりたくない仕事、許せないことも山ほどある。(a)

だからいくつ歳を重ねても、旅は大切なのだと思う。イヤな環境に慣れきってしまうと、狭い世界に閉じこめられてしまう。でも旅に出ると、自分のいる会社や組織、自分自身がちっぽけな存在であることが再認識^②できる。(b)

私は中学生のとき、学校が大キライだった。あるとき校内でお菓子を食べていたら、先生に平手打ちされて、廊下にセイザ^③させられた。禁止だ、と。そんな校則という名の拘束にうんざりしていた。なので休暇になると、ひとり旅をはじめた。お小遣いは乏しかったため、夜行列車で夜を明かしたり、寝袋で野宿をしたりした。

やはり多感な時期に旅をはじめると、やめられない。高校生になると、休暇中に2、3週間の旅をするようになり、北海道や九州に足をのばした。2年浪人して大学生になると、テスト以外は授業に出席しなくなった。国内では沖縄や伊豆諸島の島々、海外ではインド、アフリカ、中東、アラスカ、インド洋や太平洋の島々に、せつせと出かけた。

学生時代は、ちょっと焦っていた。大学を卒業して会社に就職してしまうと、もう永遠に自由な旅はできなくなってしまわないか、でも学生時代に旅の効用を知ったおかげで、社会人になってからも、仕事がつらくなると時間を見つけては旅に出た。学生のように長期間の海外旅行には出られなくても、週末や1週間ほどの休暇があれば国内外の海や島に出かけた。

大人になっても旅に出ると、いろいろなことを考える。「このままでいいのか」「会社を辞めるべきか」などと。そして会社を辞めた際には、これ幸いと、長期の旅に出た。働かずに大学院でアフリカの研究に没頭したりもした。そうして、これまで出版社など7つの会社を渡り歩いて、49歳の今は、流れ流れてフリーランスとして働いている。(c)

こんなフラフラした半生が正解だったのか幸せだったのかは、わからない。でも、誰の目も気にせずに「人生の行き先」を自由にできたのは、やっぱり旅のおかげ。旅を重ねていると、外には広い世界があることを知っている。自分が今いる環境は当たり前ではないし、自分で決断さえすれば、人はいつでもどこへでも行ける。(d)

そして旅の効用は、もうひとつある。

それは、本に親しむようになること。もちろん旅に出る直前や旅の最中には、本を読んで想像をふくらませる。でもいちばんの効用は、旅が終わったり旅に出られないときに、無性に本が読みたくなること。旅先では知らなかったことにたくさん出会うので、旅を終えると、本を読みたい衝動に駆られる。旅に出られないときは、次の行き先を考えたり、空想の旅を楽しむために、あれこれと本を読む。実際に旅するだけでなく、家に引きこもることも、本を読めば旅になる。

たとえば、世界遺産に登録された東京都の小笠原諸島。東京の竹芝桟橋からフェリーで丸1日、24時間もかかって、ようやく小笠原村の父島に到着する。出航時に見た海の暗い色が、アザやかなブルーに変化していることに驚かされる。強い陽射しや樹々の緑もまぶしい。さらに父島から船で2時間揺られれば、南の母島に到着する。「ついに最果てまで来た」と、感慨がわいてくる。母島の南には、ただただ青い海が広がっている。

でも、どうだろう。母島より南へ行く航路がないだけであって、実際には母島のはるか南に北硫黄島、硫黄島、南硫黄島がある。もっと遠くには沖ノ鳥島(日本最南端)、南鳥島(日本最東端)がある。それらは日本にありながら交通手段が一切ないために、一般的には行けない島々だ。母島から先へ向かう航路はないのに、まだまだ遠くに日本の島々が存在している。そんな不思議な思いに駆られると、旅を終えてから無性に本が読みたくなる。行けない島々は、いったいどんなところなのか、と。

たとえば本を読んでもみると、戦時中までは北硫黄島や硫黄島には人が暮らしていたことがわかる。人が暮らしていた時代には、硫黄諸島へ航路も通じていたのだ。太平洋戦争の激戦地となった硫黄島の歴史も、本を通じて詳しく知ることになる。そう、物理的に行けないから、

行けないのではない。^c本を読めば、遠くのことが見えてくる。

旅に出ると、ちっぽけな自分、何も知らない自分に出会う。だから、もっと広い世界を知りたくなる。本を読んで想像をふくらませたくなる。結局、年を重ねて「Ⅱ」が広がるから大人になるのではなく、「Ⅲ」が広がるからこそ、人は大人になるのではないか。ウラを返すと、想像力がしぼんでしまったら、どんなに歳を重ねても大人ではなくなってしまうのかもしれない。

(清水浩史

「による)

問一 部①～⑤のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 部A「旅の効用」とは何か、本文中の言葉を使って、三十五字以内と十五字以内で二つ答えなさい。

問三 部B「多感な時期に旅をはじめると、やめられない」とあるが、その理由として最も適切なものをあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア** 社会人になると時間がなくなると思い込み、青年期に旅を必要以上に多く経験することで旅そのものに慣れるから。
- イ** 時間的に余裕がある青年期に長期間の旅を経験することで、社会人では短期間の旅でも満足できるようになるから。
- ウ** 青年期から旅の中で人生について考えるようになり、旅に出ないと自らの人生の決断ができなくなってしまうから。
- エ** 青年期から広い世界があることを知り、人はいつだってどこへでも行けることについて旅を通して知っているから。

問四

本文中 I には「良い物と悪い物を分ける」という意味の四字熟語が入ります。その四字熟語として最も適切なものを、あとのア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア** 千差万別 **イ** 一石二鳥 **ウ** 取捨選択 **エ** 右往左往

問五

本文中には次の一文が脱落しています。この一文を補うのに最も適切な場所を、本文中の（ a ）～（ d ）から一つ選んで記号で答えなさい。

だから日常で耐えきれないことがあつたら、人間関係から逃げ出してもいいし、会社を辞めてもいい、と気づける。

問六 — 部C「本を読めば、遠くのことが見えてくる」とあるが、それはどういうことか、本文中の言葉を使って**六十字以内**で説明しなさい。

問七 本文中

Ⅱ

 ・

Ⅲ

 に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものをあとの**ア**～**エ**から一つ選んで記号で答えなさい。

- | | | | | |
|----------|---|------|---|------|
| ア | Ⅱ | 想像半径 | Ⅲ | 行動半径 |
| イ | Ⅱ | 行動半径 | Ⅲ | 想像半径 |
| ウ | Ⅱ | 意識半径 | Ⅲ | 視野半径 |
| エ | Ⅱ | 視野半径 | Ⅲ | 意識半径 |

問八 この文章のタイトルとして最も適切だと考えられるものをあとの**ア**～**エ**から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア** 大人と子どもの違い **イ** 旅と本の関係 **ウ** 旅に出る二つの効用 **エ** 日本の島々

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

回転木馬がここからなくなり、花壇がなくなってしまうえば、そばにあるベンチだけが遊園地の一角に残ることになる。いやベンチもまた、どこかに運ばれて行ってしまいうのかも知れない。

「木馬とベンチがなくなるのは困るなあ」

ふと、呟つぶやいていた。「母さんとの待ち合わせの目印がなくなってしまうじゃあないか」

無意識に呟いた言葉だった。自分の言葉に彼はぎよつとして、手で口元を押さえた。

そんなことを、自分が望んでいたなんて、おとなになった彼は思っていなかった。そのはずだった。

冬の日曜日、母は彼を回転木馬に乗せた。いつもは一度きりなのに、何回も乗せてくれた。その日の母はいつもよりもひととき美しい装いをしていて、表情も凛りんとして美しく、彼はうっとりとして見とれたものだった。

母はそして、姿を消した。木馬のそばのベンチに、彼を座らせて。白く甘い雪のような、ソフトクリームをその手に握らせて。

楽しい音楽と、木馬の灯りが消え、回転が止まっても、いつものように、笑顔で彼を迎えにきてはくれずに、^①忽然とつぜんと姿を消したのだ。

(どこかで、わかっていたんだよな)

母親は自分を捨てていったのだと。待っていても、もう帰ってこないのだと。

I、一方で、ここで待っていたいような気もしていたのだな、と、彼は気づいていた。

祖父母の家で幸せに暮らしながら、そのひとが迎えに来る日を待っていたような記憶もある。

母は迎えに来なかった。幼心に、思ったことがある。

(母さんは、あの屋上にいるのかも知れない)

あの回転木馬のそばのベンチに戻ってきて、彼を待っているのかも知れないと。

だって、ここで待っていてね、と彼にいったのだから。

II 風早かざはやの街がもっと近ければ、彼は祖父母の家を出て、あの屋上の遊園地に戻ったのかも知れない。

けれど、東北の幸せなその街から、風早の街は遠かった。子どもの足では戻れないほどに。

長い年月が経った。そうしてやっと、彼はこの屋上に戻ってくる事ができたのだ。子どもの頃の思いをなけば忘れてしまった、そのときになって、やっと。

彼は苦笑した。目元に涙が滲んだ。

「そうか。わたしは、母さんに会いたかったのか。母さんをここで待っていたかったのか」

ふと、フィンランドの親子のことを思いだした。バイオリンを弾く母と娘のことだ。

不器用な母は、言葉の代わりに愛を込めて、桜色のティディベアを娘に贈った。

あんなふうに彼の母も、我が子を思ってくれていたなら良かったのに、と、思った。

だが、彼の母は、彼のことを愛してはいなかったのだ。彼がそのひとを愛したほどには。

そうでなければ、息子を置いていくはずがない。屋上に捨てていくはずがない。

それっきり、会いに来てくれないわけがない。

「わかつてはいたんだ」

だけでもしかして、彼の母がほんとうは彼に会いたくて、でも何らかの理由で来られないとしたら。いまもこの国のどこかで、彼に再び会いたいと思ってくれているとしたら。

この百貨店がなくなっていたら、困るだろうなあと考えた。屋上の遊園地の、回転木馬のそばのベンチに行かなくては、と、走ってきて、もう木馬がなくなっていたら。記憶の中の母は、別れたあの頃と同じ、着物が似合う、ほっそりとした美しい女性で、その母が、屋上で、回転木馬がなくなった遊園地を見て、途方に暮れる情景を想像して、彼は新しく浮かんだ涙を拭いた。

口元は笑ってしまうのだけれど。なんて馬鹿な想像だ、と切なくなりながら。

「まったく、ひとはいくつになったら、おとなになれるのだろう」

街の空は、繁華街の灯りを受けて、うすぼんやりと華やかに明るい。その空を背景に、回転木馬は静かにそこにある。蛍の群れの光をまといつかせて。

彼はふと、そのそばに佇む、幼い日の自分の姿を見たような気がした。

少年は、泣いていた。母がいなくなった、と泣いていた。泣きながら、探していた。

何を？ 母と——魔法の白い子猫を、だ。

そうだなあ、と彼は呟いた。

「わたしは母に会いたいな。奇跡を願うなら、きっとそれだ」

馬鹿なことを、と自らを笑ったとき、目の前の回転木馬に明かりが灯るのを見た。

最初は蛍の光の見間違いだと思った。

【 X 】

思い出のままに。昔の通りに。

そして彼は、一頭の木馬の背に、白い子猫が座っていることに気づいた。

金目銀目の、左右で色が違う瞳を持つ猫は、どこか得意げな表情で彼を見つめ、一声鳴いた。何かを高らかに宣言するように。

彼はただ、回転木馬に近づいていった。

「——こんな馬鹿なことがあるはずがない」

白い子猫に近づき、その輝く毛並みに、そつと手を伸ばそうとしたとき——。

ふいに足下に振動を感じた。木の床が動いている。にぎやかな音楽が鳴り始めた。

回転木馬が動き始めたのだ。

猫が木馬に乗ったまま、遠ざかってゆく。

彼は木の床の動きに呑まれるようによろめいた。とっさにそばにあった木馬の背につき、弾みでその首にまたがるようなかたちで、

木馬に乗っていた。どうもおかしい。何か変だと思ったら、気がつくとその首にまたがるようなかたちで、

子どもの頃の姿に戻っていたのだ。

夜空は高く、木馬は大きく、立派で。音楽は懐かしく、光の点滅は美しく。

彼は弾む心で、木馬に身をゆだねていた。

そして彼は、巡ってくる情景の中に、あの日と同じ母の姿を見たのだ。

美しい母が、こちらに向かって手を振っている。蛍の光に包まれて。右手の薬指には、彼が贈ったガラスの指輪が光っている。嬉しい想

いと懐かしさが、胸一杯にこみ上げた。

ただ違っていたのは、いつもそんなときの母は、楽しげな笑顔だったのに、いまそこにいる母、夜の遊園地の暗がり、木馬の灯りに照らし出されている母は、笑顔のまま泣いているということだった。彼に向かって手を振りながら、なぜか涙をぼろぼろと流し、それを拭いても

しないで、立っていたのだった。

やがて回転木馬は止まった。木馬に飾られた華やかな灯りは消えて行き、静かな蛍の光だけが、緑色の輝きを、夜空に流していた。

彼は木馬を下りた。昔のように、母の方に向かって駆けて行った。母は泣き笑いを浮かべ、身を屈めて、彼を抱き止めようと、着物の袖をひらめかせて、両手を広げた。

「佐藤さん、佐藤さん」

誰かの手が、^⑨幾分乱暴に彼を揺り動かした。

「もう閉店時間を過ぎましたよ。どうしたんですか。こんなところで……」

いわれてぱっと覚醒^{かくせい}した。何だか眩^{まぶ}しいと思つたら、目の前に懐中電灯を持った若い警備員がひとり、身を屈めて、心配そうに、彼の顔をのぞきこんでいたのだ。

蛍が、夜空を飛び交っていた。

どうも彼は、回転木馬のそばに置かれたベンチに座り込み、眠ってしまったらしい。

すまない、と謝りながら、彼の目は母の幻を探し——やがて、深くため息をついた。

回転木馬はひっそりと闇に沈んでいる。

（ああ、夢を見ていたのか）

Ⅲ

夢だったとしても、母に会えて良かったと思つた。

（村山早紀『百貨の魔法』より）

問一 部①～③の本文中における意味として最も適切なものを、あとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

① 忽然と

ア 慌ただしく イ 困ったように ウ 突然に エ 静かに

② 弾む心

ア うきうきした気持ち イ そわそわする気持ち ウ どんよりした気持ち エ 重々しい気持ち

③ 幾分

ア 徐々に イ 全くない ウ とても エ 少し

問二 部A「わかっていた」、C「わかっではいた」とあるが、なにを「わかっていた」のか、それぞれ三十五字以内で答えなさい。

問三

——部B「子どもの頃の思いをなけば忘れてしまった」とあるが、そのことが分かる一文を本文中の——部Bより前から抜き出して、始めと終わりの**五**字を答えなさい。(句読点も文字数に含みます。)

問四

本文中〔X〕には、あとのア～エの文が書かれている。文意が通るように並びかえて、記号で答えなさい。

- ア いや見間違えようもなかったのだ。
- イ あの華やかな光が蛍のほががない。
- ウ けれど違った。
- エ 宝石のような色とりどりの灯りが点滅している。

問五

本文中 I Ⅱ Ⅲ にあてはまる言葉を、あとのア～オの中からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

- ア なぜなら
- イ でも
- ウ やはり
- エ たとえ
- オ あるいは

問六

——部D「まったく、ひとはいくつになったら、おとなになれるのだろう」とあるが、なぜそのように思ったのか。その説明としても最も適切なものをあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 繁華街の光で華やかに明るい屋上からの空の様子を見ると、気づけば子どものように明るく心躍る気持ちになるから。
- イ 子どもの頃に遊んだ百貨店の遊園地が無くなると、もう二度と回転木馬には乗れないのだと寂しい気持ちになったから。
- ウ 遊園地という存在は、何歳になっても笑顔がこぼれてしまう場所であり、子どものような心がよみがえるから。
- エ 大人になった今でも、母親の面影を思い出し、その母が迎えにくる瞬間を想像して、寂しさに涙を流していたから。

問七

——部E「なぜか涙をぼろぼろと流し、それを拭いもしないで、立っていた」とあるが、夢の中の母親はなぜ泣いていたと考えられるか。その説明として適切なものをあとのア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 彼にとって、思い出の中の母親は常に涙を流して苦しんでいる姿だったので、自然と夢の中でも彼の記憶にある姿となったから。
- イ 彼が思い描いている再会の瞬間は、お互いに複雑な気持ちを抱くものであり、自然と夢の中で涙を流す母親を作り出したから。
- ウ 彼を置いて去ってしまった母親に対して謝罪の言葉を求めていることで、自然と夢の中で彼に対して謝罪する母親を作り出したから。
- エ 母親に再会したいと願っていたが、母親も再会を願って欲しいという気持ちから、自然と夢の中で再会を喜ぶ母親を作り出したから。

問八

次のア～エは、本文について生徒たちが話し合っているものである。本文の解釈として適切でないものをあとのア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 生徒A「屋上の遊園地が失われることで、そこにあった回転木馬を前に彼が自らの過去を振り返っているのが印象に残りました。変化し消えていくものにも、誰かの思い出やエピソードがあるということを改めて実感させられたな」

イ 生徒B「そうだね、遊園地で起きた数々の楽しい思い出の中に、一つの悲しい思い出を登場させているのも考えさせられるね。楽しい思い出だけでなく、悲しい思い出も含めて遊園地だということを実感したね」

ウ 生徒C「私は、彼がフィンランドの親子をふと思いついたのがとても印象的でした。不器用な愛情表現でも深く娘を愛した母親と不器用な息子とを愛することのできなかった自らの母親を比較しているのがとてもつらく感じました」

エ 生徒D「それでも、母親に会いたいという強い思いが、最後に夢となり、救いとして描かれていたよね。幻でもそこに母親がいないかと探す最後のシーンに、今でも彼が母親を愛していることを強く感じられたよ」

四

次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

清和天皇の御時、三条堀川に住む人^① おはしけり。堀川の中納言これなかの卿と申す。家富み栄へて、何事も心に任せ給ひけり。されば、

堀川の中納言、此秋の比より、白川の姫宮に言ひ寄り給ふ。男女の習ひ、空吹く風の心ちして、つるになびかせ給ふ。度重なれば、人も知

られにけり。さればぞ、包まず、雲の上までもてなしかしづき奉る。かかる程に、はや程なく懐妊成らせ給ひけり。月重なりて、日定まり、

御産安らかならせ給ひぬ。輝く程の美しき姫君出き給ひけり。中納言有難き事に思し召して、かしづき育て給ふ。かくて過ぎ行けば、姫

君の御眉目形なのめならず。智恵・才覚世にすぐれ、大聖文殊とも言ひつべし。琴、琵琶、歌の道、人にすぐれさせ給ひけり。

(『室町物語集』より)

* 清和天皇 平安初期の天皇。八五八年九歳で即位し、八七六年まで在位。

* 三条堀川 京都市中京区、三条通りと堀川通りが交わる辺り。この辺りより北東は上層公家の邸が多くあった。

* 大聖文殊 大聖は偉大な聖者であり、仏や菩薩。文殊は文殊菩薩のこと。

問一 Ⅱ部①「おはしけり」・②「つゐに」を現代仮名遣いに直して、ひらがなで答えなさい。

問二 Ⅱ部aⅰcの語句について、その本文中の意味として適切なものを、あとのアⅰ工からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

a 心に任せ

ア 感情を殺して

イ 不自由な思いをして

ウ 思いのままに

エ 感情を抑えられず

b 雲の上

ア 夜空

イ 遠く離れた地方

ウ 山頂

エ 官廷

c かしづく

ア 大切に

イ いいかげんに

ウ うやうやしく

エ よそよそしく

問三 — 部 **A** 「日定まり」とあるが、何の日が決まったのか、**八字以内**で答えなさい。

問四 — 部 **B** 「輝く程の美しき姫君」とあるが、— 部 **B** 以外で姫君の外見について書かれている部分を本文中より**十字以内**で抜き出して答えなさい。

問五 本文中 **X・Y** の「人」とは誰のことか、その人物として適切なものをそれぞれあとの **ア～オ** から選んで、記号で答えなさい。

- ア** 清和天皇 **イ** 白川の姫宮 **ウ** 姫宮の両親 **エ** 周囲の貴族たち **オ** 中納言

問六 本文中 **I** 「給ふ」・**II** 「給ひ」はどちらも尊敬の補助動詞であり、その動作をしている人物（動作主）に対して敬意を表わしています。それぞれの敬意の対象として適切なものを、あとの **ア～オ** から選んで記号で答えなさい。

- ア** 清和天皇 **イ** 白川の姫宮 **ウ** 中納言 **エ** 姫君 **オ** 大聖文殊

問七 本文の内容を説明したものととして、適切なものをあとの**ア**～**エ**から二つ選んで記号で答えなさい。

- ア** 三条堀川には、裕福な公家たちが多く住んでおり、その一人である清和天皇はこれなかの卿と呼ばれていた。
- イ** 堀川の中納言は、家柄も高く財産も多くあったが、秋頃より一人の女性に恋をして求婚した結果、妻を迎えた。
- ウ** 姫君が生まれたのは予定外のことであったため、白川の姫宮は中納言に内緒で大切に育てることにした。
- エ** 生まれてきた姫君は、容姿が美しいだけでなく、賢く管弦樂や和歌に関しても人よりもすぐれていた。

問題は以上です。

国語解答用紙

※印の枠内には記入しないでください。

四		三		二		一	
問二	問一	問二	問一	問二	問一	問二	問一
①	③ 誤	① 誤					①
②	↓ 正	↓ 正					②
③							③
④	④ 誤	② 誤					④
	↓ 正	↓ 正					⑤
							やか

四		三		二		一	
問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	問一
	X			a	①		
	Y			b	②		
	問六			c	③		
	I						
	II						

四		三		二		一	
問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	問一
		I		C	A		①
			↓				
	問七	II	↓				②
			↓				
	問八	III	↓	s			③

四		三		二		一	
問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	問一

受験番号

名 前

※

※

※

※

※

60 40 20